

採集地は、ブナが多い落葉広葉樹林に囲まれた小規模な池である。日当たりはよく、岸際にヨシが生え、池底に落ち葉が厚く積もっている。池には細流から冷水が流れ込んでいる。2015～2017年にかけて時期を違えて池の状況を確認したところ、年間で水量が大きく変動することが分かった。5～7月にはほとんど干上がり(図2)、8月から水量が増え、9～11月末には水深が2m以上となる(図3)。約2年間で水量の変動サイクルはほぼ変わらなかったことから、同様の水量変動は毎年起こっていると考えられる。なお、12～4月は池に通じる道が積雪で埋まるため、調査は実施できていない。

本種は山間部の地すべり地形に形成された溜池に生息することが指摘されているが(永幡, 2017)、今回の産地もそれに準じるもので、地すべりでできた窪地がせき止められて水が溜まり、池状になった所である。

エゾゲンゴロウモドキと同時に得られた水生甲虫は、クロゲンゴロウ *Cybister brevis* Aube, 1838, メススジゲンゴロウ *Acilius japonicus* Brinck, 1939, クロズマメゲンゴロウ *Agabus conspicuus* Sharp, 1873, ヒメゲンゴロウ *Rhantus suturalis* (Macleay, 1825), およびミヤマミズスマシ *Gyrinus sachalinensis* Kamiya, 1936 (雄交尾器を確認済)であった。これらは水量のある時期に一時的に確認されている。また、5月には池の周辺の小さな湿地でシナノオオミズクサハムシ *Plateumaris constricticollis babai* Chûjô, 1959 が発生していた。

なお、ここから標高が50mほど下がると、水田やため池などの止水域の数や面積は増加し、それに伴って大型種としてはゲンゴロウ *Cybister chinensis* Motschulsky, 1854 やクロゲンゴロウを目にする機会が増える。しかしこの辺りになると基本的に夏場は水温が高く30℃を超えるため、エゾゲンゴロウモドキの生息環境として多くは不適であると思われる。

本稿を執筆するにあたり多数の貴重なご助言をいただいた渡貫修太郎氏(新潟県長岡市)、標本写真を撮影いただいた岩田朋文氏(富山市科学博物館)、標本の収蔵を快諾いただいた吉富博之博士(愛媛大学)に御礼申し上げる。

引用文献

- 粕谷伸孝, 2010. 新潟県でエゾゲンゴロウモドキを採集. 月刊むし, (475): 42.
 永幡嘉之, 2015. エゾゲンゴロウモドキ. p. 252, 環境省編, レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-5, 昆虫類, ぎょうせい.
 永幡嘉之, 2017. 里山の歴史を探る (9). 月刊むし, (558): 18-28.

都築裕一・谷脇景徳・猪田利夫, 2000. 改訂版 水生昆虫完全飼育・繁殖マニュアル. 255 pp., データハウス.

(岩田泰幸 160-0022 新宿区新宿 2-1-8
 公益財団法人文化財虫菌害研究所)
 (e-mail: laccotrephes_1874@yahoo.co.jp)

(高野雄一 354-0026 富士見市鶴瀬西 3-3-18)

【短報】ハラアカクロテントウを東京都と神奈川県で採集

本州未記録のハラアカクロテントウ *Rhyzobius forestieri* (Mulsant, 1853) (図1, 2) を東京都と神奈川県で採集したので報告する。

1♀, 東京都稲城市向陽台(城山公園), 16. VII. 2016, 伊藤淳採集; 1♀, 神奈川県相模原市南区相模大野, 18. III. 2017, 阪本優介採集。

稲城市産は体長3.3 mm. 木のスイーピングで得た。相模原市産は体長3.5 mm. ケヤキ樹皮下で越冬中のもので得た。標本はそれぞれの採集者が保管している。同定は佐々治(1992)と日本環境動物昆虫学会編(2009)によった。ただし後者のp. 18では和名がアカハラクロテントウとなっているが、これは誤りであろう。同書のp. 108とp. 127ではハラアカクロテントウとなっている。

本種はハワイ・フィジー・ニューカレドニア・ニュージーランド・オーストラリアから知られるほか、北米に移入されている(佐々治, 1992; 金・森本, 1995)。日本では福岡市内で見出され(金・森本, 1987-筆者らは未見)、佐々治(1992)がハラアカクロテントウの和名を与えて解説している。

本州では、ウェブ上に東京都区内での観察例が見られる(フッカーS, 2014, 2017)が、文献上の記録はないようなので、ここに報告する次第である。

引用文献

- フッカーS, 2014. 3ミリの黒いヒメテントウ その2. っぽい生きてる. <http://tokyoinsects.blog14.fc2.com/blog->



図1-2. ハラアカクロテントウ♀(阪本撮影)。1, 背面(稲城市産); 2, 腹面(相模原市産)。

- entry-2751.html (2017年9月12日アクセス)
 フッカー S, 2017. ハラアカクロテントウ. 鞘翅目/テントウムシ科. 東京23区内の虫2. <http://tokyoinsects2.blog.fc2.com/blog-entry-2001.html> (2017年9月12日アクセス)
 金 鐘国・森本 桂, 1987. 日本新記録のテントウムシ *Rhyzobius forestieri* とその生態. 日本昆虫学会第47回大会講演要旨: 35.
 金 鐘国・森本 桂, 1995. ハラアカクロテントウムシ *Rhyzobius forestieri* (Mulsant) の生態に関する研究 (コウチュウ目: テントウムシ科). 九大農芸誌, 50 (1/2): 45-50.
 日本環境動物昆虫学会編, 2009. テントウムシの調べ方. 148 pp. 文教出版, 大阪.
 佐々治寛之, 1992. 日本から最近新しく追加されたテントウムシ類. 甲虫ニュース, (100): 10-13.

(伊藤 淳 183-0012 府中市押立町 5-1-25)
 (阪本優介 252-0001 座間市相模が丘 1-27-22
 ルネ小田急相模原 モア・ステージ 1201)

【短報】キバネアラゲカミキリの成虫を晩秋の野外で採集

キバネアラゲカミキリ *Anaesthetobrium luteipenne* Pic, 1923 は, 本州 (西部), 九州, 対馬, 朝鮮半島および中国東部に分布するアラゲカミキリ族のフトカミキリ類で, クワとヤマグワ (クワ科クワ属) を寄主植物としている. 成虫は6-7月に出現し, 飼育下でも新成虫は6月下旬に羽化脱出する (長谷川, 2007). 筆者のうち伊藤は, 以下に示すように, 晩秋に野外で複数の成虫を採集しているので報告する. 採集個体は, 河川敷に生えているヤマグワの根際に積んであった, 枯葉のついた枯枝を叩いて得られたものである. 11月中旬という本種にしては異例に遅い記録であるにもかかわらず, 体表の被毛が完全にそろそろ新鮮な個体であった. また, 採集状況からみて, 後食などの活動を行っていた

可能性も高い.

2exs., 京都府八幡市河北公園, 16. XI. 2015, 伊藤建夫採集 (伊藤・新里標本保管).

カミキリムシのなかにはきわめて少数派ながら, 秋に野外に新成虫が現れ, そのまま越冬して翌春以降に繁殖活動を行うものが知られている. そうした生活環は, フトカミキリ亜科のアカガネカミキリ族とコブヤハズカミキリ族の構成種, タテジマカミキリ *Aulaconotus pachypezoides* Thomson, 1864 (ドウボソカミキリ族) とマルクビカミキリ亜科のケブカマルクビカミキリ *Atimia okayamensis* Hayashi, 1972 で観察されていて, サビカミキリ族とアラゲカミキリ族 (ともにフトカミキリ亜科) の一部でも, 野外で越冬中の成虫が確認されていることから, 同様の生態をもつ可能性が示唆されている (新里, 1979; 高桑, 2013).

カミキリムシの越冬は幼虫か成虫のいずれかのステージであるが, 後者の場合でも通常は植物体内の蛹室で行われる (新谷, 2015). 長い冬を蛹室に留まらず野外で凌ぐのは死亡リスクが高いように思われるが, あえてそうしなければならない理由として, コブヤハズカミキリ類では晩夏から秋に豊富な枯葉を後食して, 越冬明けまでに生殖器官を成熟させるためではないかという仮説も提唱されている (高桑, 2013).

今回報告したキバネアラゲカミキリの採集個体は, 秋になって野外に羽化脱出したものか, 初夏に発生した個体がいったん休眠した後に再び野外で活動をしているのか推測の域を出ない. しかしいずれにしても, 本種の成虫が秋季に野外で活動する生態を裏付ける観察例として, たいへん興味深いものといえる.

引用文献

- 長谷川道明, 2007. フトカミキリ亜科アラゲカミキリ族 (種の解説). Pp. 616-631. 大林延夫・新里達也 (編), 日本産カミキリムシ. 818 pp. 東海大学出版会, 秦野.
 新里達也, 1979. クモノスモンサビカミキリの成虫越冬場所. 月刊むし, (100): 42.
 新谷喜紀, 2015. II. フトカミキリ亜科のカミキリムシ類の行動と休眠. 6. キボシカミキリの生活史と休眠. Pp. 186-224. 岩淵喜久男 (編), カミキリムシの生態. 389 pp. 北隆館, 東京.
 高桑正敏, 2013. 非武装地帯の崩壊がコブヤハズ群にもたらしたもの. Pp. 191-236. 新里達也 (編), カミキリ学のすすめ. 309 pp. 海游舎, 東京.

(新里達也 185-0021 国分寺市南町 1-14-35)
 (伊藤建夫 614-8371 八幡市男山雄徳 7 E12-102)

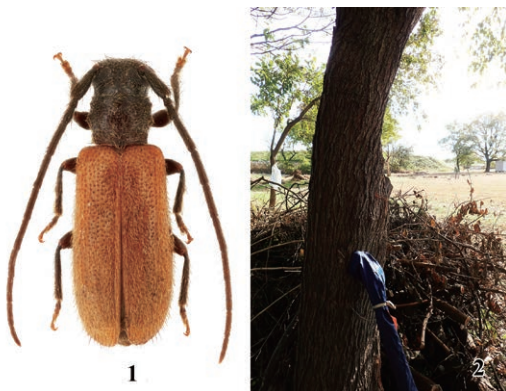


図1-2. 晩秋に野外で採集されたキバネアラゲカミキリ成虫 (1) と採集場所 (2).